

持続可能な部活動

— コロナ禍で改めて見えてくる大切なこと —

(公財) 全国高等学校体育連盟研究部 活性化委員会

委員長 鞠子 智秋 (東京都立清瀬高等学校)

委員 中塚 義実 (筑波大学附属高等学校)

松尾賢太郎 (神奈川県立湘南高等学校定時制)

宮川 明 (千葉県立千葉西高等学校)

I. はじめに

部活動が大きな転換期を迎えている。2020年初めに発生が確認された新型コロナウイルスの世界的パンデミックにより、日本も教育の閉鎖措置がとられ、部活動も止まった。その最たるはインターハイ「魅せろ躍動 北関東総体2020」の中止である。高校生たちの活躍と活動の場が失われ、その影響は全国各地に広がり、地域格差も生じさせた。東京オリンピック・パラリンピック2020の1年延期にも及んだこの大きな傷跡は現在もお私たちの痛みとなっていて。令和2年度、この全国研究大会(長崎大会)も開催直前で誌面開催となり、部活動改革のうねりはこの新型コロナウイルスによる影響を受け、もっと大きなうねりとなって私たちに襲い掛かっている。コロナ禍で2年ぶりに開催される今研究大会では、これまでの背景や部活動や研究の意義を改めて問い、再確認する場として重要な大会となるであろう。ここでは皆さんと一緒に、これまでの部活動改革の動向そして本研究大会の経緯を振り返っておきたい。

平成30(2018)年3月にスポーツ庁が「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」を示したのに続き、同年12月には文化庁が「文化部活動の総合的なガイドライン」を公表した。このガイドラインを踏まえ、都道府県、区市町村は指針を策定し、学校ごとに策定される指針に沿って部活動が進められることとなっている。そして、令和2年9月には「学校の働き方改革を踏まえた部活動改革について」より、今後の部活動改革の考え方が示された。

これに先立ち全国高体連研究大会では、分科会に収まり切らない大きな「課題」に向き合う課題研究を、平成21(2009)年度より導入した。これまでの課題研究は表1のとおりである。

＜表1. 全国研究大会 課題研究テーマ一覧(平成21～令和2年度)＞

年度・開催地	発表	テーマ	キーワード
平成21年度 (2009) 山形	宮城県	どんげかしたい宮城県の部活動 —顧問支援ハンドブックの作成と活用	部活動運営、顧問支援
	東京都 (ラグビー専門部)	複数校合同運動部活動の成果と課題に関する研究 —ラグビー専門部の取り組みから見えるもの	少子化、部活動の運営組織、競技団体との連携
平成22年度 (2010) 兵庫	広島県	高体連活動に新しい意義と価値を見出す広島風アプローチ —感動発信! 広島県高校生レポーターキャラバンがつづむスポーツコミュニティ	高体連活動の新たな意義・価値、 「みて・伝えて・支える」スポーツ
	千葉県	運動部活動と社会人形成 —社会人基礎力をはじめとする社会のニーズと運動部活動の方向性	運動部活動の意義、キャリア教育、人間形成
平成23年度 (2011) 鹿児島	宮崎・東京(ラグビー)・ 広島・千葉	シンポジウム: 高体連活動の可能性と課題をさぐる —課題研究への取り組み(日常)と東日本大震災(非日常)を中心に	—
	宮城県	東日本大震災と宮城県高体連 —“非日常”からみえる可能性と課題	東日本大震災、被災と復興、部活動の意義、 スポーツの意義、学校と地域、非日常
		(「BUKATSU2011」—部活に入ろうキャンペーンの展開)	(部員の勧誘・確保、部活動による学校の活性化、 生涯スポーツの継続)

年度・開催地	発 表	テ ー マ	キ ー ワ ー ド
平成24年度 (2012) 栃木	北海道	北海道高体連主催大会参加者災害補償制度の導入の経緯と現状	制度設立、災害補償、保険
	岩手県	東日本大震災と岩手県高体連 －県総体総合開会式と北東北総体への取り組みをめぐる	総合開会式開催の意義、震災下での競技会、 東日本大震災、復興支援、復興に向けて
平成25年度 (2013) 岐阜	愛知県	運動部活動顧問を取り巻く現状と課題 －東海4県の顧問対象意識調査から見えること	顧問対象意識調査、若手指導者へ伝えたいこと、 指導者を取り巻く環境
	(石川県)	(インターハイブロック開催2年目を終えて －2012北信越かがやき総体から見えてきたもの)	(インターハイの意義、地域の活性化、県と市実行委員会 の設置・役割、固定開催、経費削減と収入確保)
	活性化委員会	活性化委員会からの報告と提言 －今後の「研究」と「実践」のために／「体罰」のない運動部活動への視点	－
平成26年度 (2014) 徳島	徳島県	学校体育・スポーツの充実を図る徳島県の取り組み－スポーツ助手の活動	選択制体育授業の充実、指導者の確保、 指導者のキャリア、スポーツ助手、ICTの活用
	JISS	スポーツでの映像の活用－高校生の指導現場にどう活かすか	スポーツ教育、スポーツ映像、映像の活用、 運動技術の指導、見るスポーツ
平成27年度 (2015) 宮城	千葉県	一人ひとりの生徒が輝く運動部活動を求めて －部内専門委員会の立ち上げとその取り組み	部活動の意義、クラブマネジメント、スポーツの可能性、 学校内外との連携、「する・観る・支える・調べる・伝える」
	活性化委員会	研究大会50年のあゆみ	－
平成28年度 (2016) 富山	北海道	「学び」を生かす多角的アプローチ－札幌南高校陸上競技部の取り組み	学び、アプローチ、アクティブラーニング、生きる力
	富山県	高校運動部活動の魅力を探る － 富山県高体連における追跡調査を通して	少子化、運動の継続、男女差、開設部活動数、 運動部活動の魅力創出、経年的調査
平成29年度 (2017) 島根	活性化委員会	2020年へ向けて － 高体連研究部の新たな使命	－
平成30年度 (2018) 山梨	千葉県	安全・安心な部活動を目指して －千葉県における安全情報の普及・浸透への取り組み	安全管理、事故防止、災害補償、安全管理マニュアル
	活性化委員会	シンポジウム：高体連研究部の新たな使命Ⅱ －安全・安心な部活動に向けた「みえる化」と「できる化」	－
令和元年度 (2019) 滋賀	東京都	運動部活動が育むものとは何か －部活動の存在意義についての東京都の調査研究	部活動の意義、健全育成の実態、教育的価値、 社会人基礎力、充足度、見える化
	活性化委員会	シンポジウム：高体連研究部の新たな使命Ⅲ －部活動で育まれるものの「みえる化」と「できる化」	－
令和2年度 (2020) 長崎	長崎県	「持続可能な部活動を目指して」 ～長崎県の実態と取り組み、そしてこれから～	顧問の意識、退部者、途中入部者、ガイドライン 生徒の自発的・自主的な参加
	紙面発表のみ		－

課題研究は毎年2題出ることを想定し、開会式後の全体会をその発表に充てている。2題出なかった場合は活性化委員会でテーマを設定し、シンポジウムの形で情報交換の場を設けている。平成29年度の島根大会から令和元年度の滋賀大会までは「高体連研究部の新たな使命」と題し、部活動の在り方を議論する場としてきた。

平成29年度の島根大会では部活動のあゆみと現状、位置づけと今後の展望について識者の意見をお聞きした。その内容を踏まえ、高体連研究部は右のような課題に向き合うことを使命とすべきであると、活性化委員会から提案した。

平成30年度は「高体連研究部の新たな使命Ⅱ－安全・安心な部活動に向けた“みえる化”と

“できる化”を取り上げた。指導現場におけるさまざまな取り組みについて千葉県が課題研究として報告し、講師の内田良氏（名古屋大学）から、エビデンスをもとに“みえる化”する手法を学ぶとともに、現状と課題、今後の方向性について貴重な示唆を得た。令和元年度は部活動の意義・使命を明らかにする調査研究発表を東京都が実施し、「部活動で育まれて

「高体連研究部の新たな使命」（島根大会シンポジウムより）

1. 目指すべき部活動の姿を示す
 - 1) 安全で安心な部活動を目指して
 - 2) 多様な価値観の受け皿となる部活動を目指して
 - 3) 自主性や創造性を育む部活動を目指して
 - 4) 学校生活を構成する「学校文化」として
2. スポーツと教育のあるべき姿を示す
 - 1) 勝利至上主義の弊害とゆたかなスポーツ文化の享受
 - 2) オリンピック教育の可能性と実践事例
3. 学校教育における部活動の位置づけとその解決策を示す

いるもの」のみえる化を試み、一つのエビデンスとして共有した。東京都は部活動が育んでいる教育的価値や財産及び育み切れていない力が何であるのか、課題を明らかにすることを目的とした。この調査結果では社会人基礎力という視点をを用いてアンケートを作成実施、部活動が生徒の健全育成にどう貢献できているかを明らかにした。12項目ある社会人基礎力の中で、特に主体性、傾聴力、柔軟性、規律性が育まれたという結果が得られた。また、体力・健康の向上や心を許せる仲間の形成など、部活動が生徒の生活を充実させる貴重な時間であることが示された。とは言え、部活動の教育的意義や成果についての“みえる化”はまだまだ足りていない。「結果がすべて」と、部活動の成果が競技成績に置き換えられていたり、「あの頃はきつかったけど、それが今活きている」との類の卒業後の思い出話に終始して、データとして蓄積されることがないまま放置されているように感じる。部活動の在り方が問われる今だからこそ、部活動の現状をよい面も改善すべき面もともに“みえる化”する試みは継続すべきである。これは高体連研究部の重要な使命であり、課題研究のテーマとして有効である。令和2年度の長崎県の課題研究発表は「部」や「顧問」という単位で部活動の持続性に必要な要素を“みえる化”した。そして、今年度の福井県の課題研究では「組織」や「大会」という単位での持続可能性を“みえる化”したものと捉えて良いのではないか。学校現場が直面している新型コロナウイルスによる活動制限とこの部活動改革の挟み撃ちは大きな痛みとなっているが、その渦中にある「部活動」や「大会運営」に新たな視点をもたらしてくれるものである。

Ⅱ．持続可能な部活動を目指して ～長崎県・福井県の課題研究を通して～

昨年度誌面開催となった長崎大会の大会主題は「やるバイ！部活動革命」～未来につながる新たな時代への道標～であった。課題研究は「持続可能な部活動を目指して」と題して長崎県中里圭輔氏に誌面発表いただいた。この研究では、持続可能な部活動であるための「部の魅力創出」をキーワードとして調査結果を報告すること、そして「今後の在り方を提案」することであった。以下、主な概要を記す。

長崎県は、日本の最西端、九州の西にある日本一島を有する県であることから以下のような変化や課題を抱えている。

【長崎県の部活動を取り巻く状況】※キーワードとして文中より引用

少子化と生徒数減少、種目ごとの部員数動向変化、離島の学校、船・遠征費などの費用、練習環境や練習相手の確保が困難、学校および部の統廃合、教員の勤務時間、休養日設定などの制限 他

県内部活動の活動状況調査の中で、好事例として抽出された部活動やその創意工夫点が紹介された。その中では、少人数部活動であっても存続し続け、部員確保ができる要点が含まれていた。

【好事例からの要点】

個人への手厚い指導、少人数を生かして自ら定めた目標への挑戦、敷居を低くし、意欲をもって取り組める初心者への配慮、初心者と経験者のペアラーニング、部活動種目以外との接点など

これらの好事例の要点から垣間見られる内容は、部活動の個別化であるように思われた。部員個々の満足度を上げていくことが部としてのまとまりをつくり、満足感や達成感を味わわせ、健全育成へとつながるという仕組みである。この研究では、3度にわたる調査から、部活動における顧問の取り組み方が部に与える影響は大きく、持続可能な部活動を目指す上で非常に大きな役割を果たすことが見えてきたとまとめられた。

【顧問として】

- ① 部活動の中で何を部員にさせたいかが明確であること
 - ② 部としてどういうビジョンを持って活動しているかが明確であること
- これらに加えて、保護者や地域との連携、生徒勧誘の工夫、顧問自身の意識改革、部員の人間育成などへの取り組み

部員が減少すると日頃の練習やその内容、大会参加に大きな支障が出る種目もあることは承知している。その面では、合同チームの編成や他校との交流練習などでの実践経験を積みせる機会の保証など、計画性をもって活動を進める必要も考えられる。しかし、部員が少ないからといってあきらめる必要はなく、部活動の持続化にどのような視点が必要かを以下のように位置付けた。

【まとめ・持続化に必要な要因】

- ① 顧問の創意工夫による取り組みがあること
- ② 魅力創出となるような付加価値を部活動につけること
- ③ 部員が満足感や達成感をもって取り組んでいること

以前の『生徒が多い時期を取り戻す』という考え方では、持続可能な部活動を営めないと部活動指導者は意識を変える時期に来ているのかもしれない。少ない人的資源をどのように活用し、育み、部活動を存続させていくのか今一度皆さんで議論を深めていく必要がある。ここが冒頭に申し上げた大きな転換期たる所以である。従来の発想を転換し、ある一定の種目だけを部活動で取り上げるのではなく、シーズン制で部活動をやってみる。夏は水泳、冬はサッカーというように。あるいは、3年生が部活動にいる春夏はチームスポーツを試みて、人数の減る秋冬は個人種目に取り組むなども良いだろう。少ない人的資源を有効活用し、健全育成に繋げ、豊かな運動・スポーツ文化の形成を図ることはもっと重要視されて良い価値観ではないかと思う。チャンピオンを決定することだけが部活動の存在意義ではないし、そのような偏った捉え方では持続可能性は見いだせなくなるだろう。

Ⅲ. 新型コロナウイルス感染症蔓延の学校現場・部活動への影響～

昨今の学校現場は感染症対策と教育環境整備がこれまでになく同時進行している。コロナ禍において、最も守られたのは授業であった。ただし、学校において授業だけが大切なのではないし、止むを得ず中止の対象となった行事、委員会活動、修学旅行などにも果たしてきた大きな教育価値や効果がある。それらの豊かな教育体験の乏しい子どもたちは社会に出ていくために必要な力を育てているのか、人格形成やコミュニケーション能力育成への影響は出ないものかと危惧する声もある。そこに、部活動の中止や活動制限である。不要不急という言葉が世の中を監視し、学校現場をも監視した。その結果、活動停止に追い込まれ、大会中止も経験した。長らく止まることのなかった部活動は立ち止まり、考えることを強いられ

たのである。さらには、部活動ガイドラインの存在もある。首都圏や地方の大都市などの主要な地域とそうではない地域との差もあり、同じ東京でも都心部とそれ以外でも差が生じている。その中で、一律のガイドラインに従って部活動を実施し、生徒の学校生活の充実度を高め、仲間の形成を図り、実力を伸ばし、大会に臨むことは容易ではない。学校間格差、種目間格差、校内格差、あらゆる状況が想定されるのではないかと考えている。それでも、現場は立ち止まらない。この間、自分たちが部活動を通してどうなりたいか、どうありたいかを必死に考えたものたちがいた。制限された日数や時間の枠内でも、工夫し、密度を上げれば楽しめるのではないかとオンラインミーティングで繋がり、自主練習に取り組んで励まし合った。コロナ禍におけるプラスの面として、部活動を持続発展させる上で、大切なことが見えてきた。改めて、問い直した部活動の価値。大会開催の意味や意義。学校は授業だけを日常に戻してもダメであると同じように、部活動でも何を止めて、何を進めていくべきかを本気で検討するチャンスが到来しているのである。

【部活動に係る主な感染症対策】

健康観察や記録、体調不良者は登校を控える、通院や検査の促し、手指消毒、検温、マスク着用、試合の大会同意書、無観客試合、密や接触を避けた練習、対外試合の禁止、県外への移動制限、宿泊を伴う活動禁止、飲食場面の削減や対策、円陣や大声の発声禁止や制限、応援禁止、活動時間や活動日数制限、公式戦が終了とともにしばらく活動休止に追い込まれる 他

これは、全国一律ではないにせよ概ね皆さんが実施している感染症対策であると思われる。生徒やその保護者、顧問の安全と安心を守るために必要な対策とはいえ相当な負担となつてのしかかってくる。運動部活動で育む力、態度、社会経験値の獲得など失ったものは数かぎりない。

IV. まとめに代えて ― 持続可能性へ向けて

コロナ禍において、部活動は人と人とのつながりを確保するセーフティネットの役割を果たした。部活動が生徒の健全育成に果たす役割は大きいことが示されたと考えられる。また、部活動は不要不急の取り組みではないことから、部活動は禁止、大会は中止になり、部活動参加への意欲の低下、競技力の低下が起きたと考えられる。この2点について、「考えられる」という言葉を外すことができる根拠がこの研究大会で示されるとよいと思っている。

こうした現状にあるからこそ、そして部活動改革真っ只中にある今だからこそ、研究部が持つ役割を再確認したい。研究部には「競技力の向上」・「健康と安全」・「部活動の活性化」という3分科会があり、この3分科会にまたがる横断的な研究に取り組める「課題研究」がある。今大会の課題研究、分科会研究の発表に至るまでには例年にも増して相当な苦労があったに違いない。研究成果はもちろん、これまでの苦労談も含めて皆で共有し、明日への希望を見つけていきたい。今は細々とした活動となっても、あゆみを止めないことである。青森大会の主題は「創ろう！ワールドワイドな運動部活動～縄文のまほろばから世界をみつめて～」である。今一度、従来の『当たり前』を疑い、無理や無駄はないか、もっと良い方法はないかと探ることに挑戦したい。部活動が良いものであると信じるのであれば、この研究部・研究大会を大いに活用し、その意義を声高に叫ぶものとしたい。

【全体司会】境香織（フリーパーソナリティー） ※以下：全体司会

ただいまから、課題研究・シンポジウムを始めさせていただきます。最初に、檀上のお二方をご紹介します。課題研究発表をしていただく、福井県立丹生高等学校、谷口康治様です。

【発表者】谷口康治（福井県立丹生高等学校） ※以下：谷口先生

どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

【全体司会】

そしてもう一方、司会進行をしていただく、全国高等学校体育連盟研究部活性化委員会委員長、鞠子智秋様です。

【司会】鞠子智秋（全国高等学校体育連盟研究部活性化委員会委員長） ※以下：鞠子先生

よろしくお願いします。

【全体司会】

ここからの進行は、全国高等学校体育連盟研究部活性化委員会委員長の鞠子様をお願いいたします。それでは、お願いいたします。

【鞠子先生】

会場にお越しの皆様、改めまして、おはようございます。全国高体連研究部活性化委員長を務めさせていただいております、東京都の鞠子と申します。前活性化委員長の中塚先生から引き継ぎ、滋賀大会では東京都を代表して課題研究の発表をさせていただきました。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

さて、2年ぶりの全国研究大会です。昨年度はインターハイの中止、そして、長崎県で開催予定としていたこの研究大会も、新型コロナウイルスの感染拡大を受け誌面開催となりました。直前まで現地開催に向けてご準備くださった長崎県高体連関係者の皆様、その節は大変お世話になりました。ありがとうございました。

残念な形ではありましたが、その経験が今回の青森大会へと引き継がれております。今大会も感染急拡大で東京都が直前に参加を見合わせる事態となっております。また、雪等の影響で会場に来られない方もいるのではないかと思います。そんな中ではありますが、大会を成功させるため、熱く研究話に花を咲かせていきたいと思いますが、感染対策や体調管理などについては、ご注意とご協力をください。皆さんのお力を結集してこの大会を進めていきたいと思っております。

では、本日の流れです。今年も研究大会、開会式後の90分間、課題研究1本の発表とシンポジウムの流れで進行させていただきます。3つの分科会では収まりきれない横断的な課題に取り組んでいく趣旨で課題研究が始まって、今回で13年目となります。お手元にこちらの資料をお持ちでしょうか。これまでの課題研究のテーマ、発表者が掲載されております。一昨年まではメインテーマとして「高体連研究部の新たな使命」と題して、部活動の現状の「見える化」や「できる化」をキーワードにして、3年間取り組んでまいりました。そして、昨年度は長崎県開催で、長崎県が課題研究に取り組んでくださいました。「持続可能な部活動を目指して」というタイトルで長崎県の実態と取組を非常に興味深い内容でまとめられました。今年もその「持続可能な部活動」という言葉をメインにし、皆さんで考えていこうというのが狙いです。

そこで、今年度は福井県の登山専門部が課題研究に取り組んでくれました。登山というと思いきわされる事故があります。それは2017年3月、栃木県高体連の登山専門部が開いた春山安全登山講習会で起きた事故です。その件については、現在裁判が進行中です。持続可能

な部活動、安全・安心な部活動を考える上では避けて通れない案件ではありますが、今回は雪山ではなく、夏の登山大会メインの研究発表としてまとめていただきました。そのことをご理解の上、お聞きください。

発表を踏まえ、後半では長崎県の課題研究に取り組まれた中里さんを壇上にお招きし、谷口さん、私を含め3名でディスカッションを進めていきます。最後は会場全体で意見交換できればと考えております。ご協力よろしくお願いいたします。

それでは、お待たせいたしました。谷口さん、よろしくお願いいたします。

【谷口先生】

会場の皆様、こんにちは。私は福井県立丹生高等学校から参りました谷口康治と申します。課題研究の発表に入っていきたいと思えます。

突然ですけれども、皆様、この曲を知っているでしょうか。back number「水平線」です。2020年のインターハイ中止でやり切れぬ思いの高校生たちに向けて作った、群馬県出身のバンドマンたちの曲です。どうか皆さん、一時的に17歳の自分に、素直な自分にタイムスリップしてこの歌詞を聞いてください。

(back number「水平線」)

ずっとこのまま聞いていきたいのですが、歌詞に「正しさを別の正しさで失くす悲しみ」というフレーズがありました。私はこの歌詞は、非常に深い意味が入っているなと思いました。最初の「正しさ」、高校生がひたむきな練習を重ね、県の予選を通過し、全国レベルで通用できるまでの練習を積み上げてきた「正しさ」、後の「別の正しさ」というのは何でしょうか。私は、それでも新型コロナウイルスの影響でこの大会を中止せざるを得ないという「正しさ」だと解釈しています。それを失くす悲しみにも出会うのだと。このようにback numberは楽曲を作りました。その楽曲が2021年（令和3年）インターハイ福井大会のときにリリースされました。北信越インターハイ「輝け！君の汗と涙」、福井大会がこの5カ月前に実施されました。

そして、私は今、課題研究の発表を皆様に提案していきます。この課題研究というのは、先ほど鞠子委員長からも話がありましたが、2つの課題に通用しているかどうかというのが審査されました。今、令和4年1月ですけれども、ちょうど1年前、令和3年1月に、私は福井県勝山市というところで派遣教員としてインターハイの準備を進めていました。そのときにどうやってインターハイの登山大会を準備していけばいいのだろうか、役員、物品、予算の配分、じわりじわりと広がっている感染症、この後、登山は香川県、北海道とつないでいく、持続大会になるにはどうすればよいのかなど、これは課題研究にふさわしいのではないかと思いながら、準備と共に研究を進めてまいりました。

改めまして、私の発表タイトルです。「高校生にの夢の舞台を実現するには一持続可能なインターハイ登山大会—」ということです。

会場の皆さん、おそらく登山大会というのはご存じないと思いますので、本当に手短かにまとめていきたいと思えます。インターハイ登山大会というのは、各県男女1チームずつ参加する700人規模の大会です。オリンピック種目であるクライミングではありません。宿泊を伴う登山です。このような山を歩いていく、ペーパー試験もあるというような形になっております。

そして、この大会はどのような審査が行われるのか。インターハイ登山大会の審査は、例えば、天気図を作成する、テントを設営する、計画書を作っていく、必要な救急用品を持っているか、また、知識も持っているか、必要な装備を持っているか、安全かつ衛生的に炊事

ができていかなどが審査されていきます。登山大会は選手が4名、監督を加えた5名の団体競技です。個人種目はありません。体力・歩行、生活技術、知識・読図、合計11項目を、審査員が男女それぞれ山の中にひそんでいて審査をしていく。フィギュアスケートの審査員のように、各審査員がジャッジの点数を持っていて、100点満点で競います。3泊4日の登山です。

ここで時間を令和2年3月に戻します。皆さん、思い出してください。3月初めに安倍首相が全国一斉休校を打ち出しました。そして、3月下旬、東京オリンピックとパラリンピックが延期となりました。4月1日から私は福井県勝山市に片道1時間半、往復3時間をかけて勤務が始まりましたが、その4月下旬には全国高校総体、北関東総体が中止となりました。しかし、福井大会は何とか準備を進めていきたい。勝山市長を訪問し、説明しに行ったとき、勝山市長から「谷口さん、2年連続インターハイが中止になるというのはよろしくないですよ」と、市長自らが私に話をしてくれました。私も「そうですね。何とか高校生に夢の舞台を実現したいと思っています。頑張りましょう」と、自治体のトップから励ましを受けてやる気を沸々とさせていただきました。そして、持続可能なインターハイを目指していきました。

本日皆さんに分かっていただきたいことは、福井大会前の現状はどうだったのか。強みと弱みがあります。大会を実現するには重点対策をどうしたのか、そして、この後の香川県、北海道、あるいは他競技、陸上、サッカー、ソフトボールなどの協議にも同じような成果と課題が共通するものがあるのではないかと。キーワード1、2、3として発表を進めてまいります。

では最初の、福井大会前の現状、キーワードの1つ目、「強みと弱み」。ここにSWOT分析と書きましたが、アメリカの経営学での分析スタイルです。ご存じの方もいるかもしれません。例えば、ある企業なりある事務局なりが何かイベントをしたいという場合、内部環境のプラス、Strength（強み）、一方、マイナスはWeakness（弱み）。外部環境のプラスはOpportunity（チャンス）、マイナス環境がThreat（脅威）ということがあります。スターバックスを青森駅につくってみようという場合、企業などはこのようにして分析しながら着実に進めていく、これをインターハイ福井大会事務局も同じような形で考えてみました。SWOT分析です。

福井大会の場合、事務局、福井県庁全国総体準備室、高校教員、自治体の職員、福井県の職員がしっかりしていました。それから、勝山市にはジオアリーナという新たな体育館が出来上がっていました。自然の家もありました。一方、ここが一番の悩みどころのウィークネスです。福井県で山岳部がある学校は3校しかありません。顧問もかき集めてきても全部で10人ぐらいしかいません。ただ、インターハイを実施しようと思うと、登山できる役員、教員が最低100名は必要です。あとの90人をどこから集めてこないとならないという弱点がありました。さらに困ったことは、群馬大会が中止になったために直前の視察、裏方の舞台裏とか、そのようなものが全く分からなくなった。さらには、福井といえば百名山、荒島岳を全部の選手・監督さんに登っていただきたい。荒島岳がある自治体は大野市、事務局があるのは勝山市、小さな声で言いますが、隣同士、犬と猿の関係というような、「荒島岳は使いたいのですが」と勝山市の職員に相談しますと難しい顔をしてしまいました。このような状況もありました。さらには、スキージャンプ、標高700mぐらいの芝生ですが、全国選手の皆さんに夏の暑いところを高原で過ごしていただきたいと思っていたのですが、支配人が変わった途端、これはまかりならんということで、これもダメと言われて、ズタズタに準備が

できなくなっている状況でした。

さて、外部環境です。そんな中でも、事務局の外側では、例えば北信越の富山県、あるいは石川県の登山専門部の教員、滋賀県、愛知県、三重県の登山専門部教員が喜んで協力しますと言ってくれました。これらは大きなものでした。さらには、ここに「教え子たち」とありますが、私がかつて山岳部の顧問をしていたときの教え子たちが小中高の教員として、あるいは、医師、看護師としてこの大会に駆けつけてくれました。これは本当にありがたいことでした。

一方、脅威に入ります。言うまでもなく新型コロナ対策です。私の今日の発表は、全体の6割から7割が何らかの形でコロナウイルス感染に関わっていきます。これをいかにしてシャットアウトするか、予防するかということにかかってきます。この分析をしておきました。

実はこのスライドが自分の中で大事だな、そして、皆さんもぜひこういうケースがあった場合に考えてほしいと思っています。一旦止まっていたものを再び継続していくには、思い切った改革をしないと、前と一緒のものをそのまま何とか復活させればいだろうというわけにはいきません。随分厳しい思いをしながら変更に入りました。

例えば、時期ですが、東京オリンピックとパラリンピックが開催されているときはインターハイをしないでくださいという要望がトップから入ってきたので、天候が安定している8月上旬から下旬に移さざるを得なくなりました。

そして、コースですけれども、①は変更して、②の経ヶ岳はバス輸送ができないということで断腸の思いで、きれいに登山道を整備したのですが、でも、そのコースは使わないという判断を8月1日からしました。これも内部でかなりもめました。しかし、インターハイを実施することを最優先に考えましょうということで経ヶ岳を断念、そして、取立山コースを残しておく。

それから、問題の宿泊地です。先ほど選手4名と言いましたが、4人が1つのテントで寝るというのはあり得ません。これはダメであると。そこで、男子は勝山市体育館に2泊、女子は自然の家に2泊。本来ですと、自然の家に男子も女子も収容したかったのですが、収容人員オーバーということで、このような形になりました。審査も従来の炊飯審査は密になるからできない。事務局が弁当を手配する。おかげで事務局の事務作業量は膨大に増えました。しかし、やむを得ない。装備審査でも感染症の予防の品目を追加して、このようになりました。これらは事務局だけではなくて、全国の登山専門部、あるいは、福井県の総体準備室とも常に連絡を取りながら、一つ一つ変更していきました。思い切った変更をしないと進めないというのが正直なところです。いずれも新型コロナ感染のものです。

大会を実施していくには重点対策、キーワードの2つ目です。「安全・安心な大会」「持続可能な大会」、この2つを目指して感染症への対策、ヒト・モノ・カネ・情報、効果的・効率的配分をいかに進めていくかということです。このことを仮説のような形で文章化してみます。言い換えますと、この2つの目標のためには、①感染症対策を明確にし、②役員・物品・予算などを最適化する、必要最小限にする。そうすれば登山大会ができるのではないかと思います。

まず、コロナ感染症への対策です。予防策としては、事務局から全部の選手、監督さんに送る実施要項とか注意事項は明確な文章にする。今日皆さんは健康観察チェック表を出されたと思いますが、健康カードも登山用のものを選び、役員、一般報道陣までいくつも資料を作りました。大会中には健康カードの運用も考えてみました。

そして、県大会レベル、あるいは、地区大会、例えば東北大会であるとか関東地区大会であるならば、予防策までで私は十分ではないかと思います。万が一、状況が悪くなったので中止しますと言っても電話連絡で済みます。ところが、インターハイはそういうわけにはいきません。対応策をしっかりとっておく必要があると言いました。これを一番強く言ったのは私です。これはどういうことかということ、大会の可否判断、言い換えれば、どんな条件だったらインターハイを中止しますかというのをはっきりさせてくださいと。そして、これは登山だけではなくて、陸上もサッカーもソフトボールもみんな同じになります。ここはかなり苦労しましたが、結論は、令和3年1月に福井県総体準備室にお願いしたところ、2週間後に総体室長と室長補佐が三重国体をモデルにしながら中止条件を策定してくださいました。まだまだたくさんありますが、重要な項目だけ言いますと、福井県が国の定める非常事態宣言下に入った場合、あるいは、欠席者が全体の25%を超えた場合、例えば、登山大会が400人の選手、監督がいるとしたならば、4分の1ですから100名までは大会をしますが、105名になったら中止の方向に入る。それまでひたすら準備はしていく。あと、このような状況の下では中止という条件もしっかり決めておきました。これはよかったです。なお、このことは大会2週間前ということです。

そして、大会中は中止の決定過程と発表、発表は福井県実行委員会はしません。全国高体連が発表するなどの取り組みもしていきました。

感染症の対策、明確な文章化の例です。これもたくさんあるのですが、一番上だけ注目してください。「登山行動中は、歩行中・飲食時を除き、選手、監督、役員はマスクを着用する」。事務局から選手、監督に「適切に予防してください」、こんないい加減な言葉ではダメです。つまり、マスクをつけるときとつけないときを明確化しました。外してもいいのは「歩行中・飲食時」です。そういうのを読み取ってくださいということです。以下は省略していきます。

個人健康カード、これも国際山岳看護師と連携をとりながら、どれだけ水を飲んだか、尿は何回したかとか細かな健康カード、個人と団体とそれぞれ作りました。これらを個人だけではなくて監督を含めたチーム、宿泊員、登山行動を一緒に行う医師、看護師、医師4人、看護師4人に頼んでありますから、情報を共有し、いつでも相談できる体制をつくっておきました。

続きまして、2番目のヒト・モノ・カネなどの最適化です。時間の関係上、ここは少し軽く進めていきます。詳しくは大会紀要の13ページに文章、あるいは資料、同じものが出てきますけれども、それをご覧になってください。役員、物品、予算、情報、事前行事については、今、スライドに出っていますが、このような形で進めていきました。

役員について、隊長・副隊長、班長・副班長などの数は、最終的に言いますと、同じ数でした。しかし、役員の配置換えをしながら、より安全な大会を円滑に運営できるように工夫をしたつもりです。

続いて、この写真をご覧になってください。下にしゃがんでいるのが国際山岳医師を含んだ4人のドクター、医師です。男子隊に2人、女子隊に2人です。一番右の女性のドクターは、私が福井県の藤島高校の山岳部のときに一緒にインターハイに出場した選手の一人です。彼女は10年前、ここ青森大会の登山大会に来たときに、岩木山と八甲田山を登りました。そして、今回の福井大会にも駆けつけてくれました。後ろの看護師は別の高校の山岳部出身で、現在、岐阜大学で看護師をしています。

続きまして、気象予報士の7名の方に来ていただきました。天気図の採点、あるいは大会

中の予報などです。

ここにまとめましたけれども、最初に言いましたけれども、福井大会は人が少ない。それを自衛隊を含めて、何とかかんとか200名集めてきました。しかし、配置等の工夫はしたけれども、よそから集めてくるということは、業務を分かっていたら研修をどんどん重ねていかなければなりません。全部参加して下さった人と、忙しくて来れなかったという人がいたので、業務研修に関しては課題が残ったし、忙しいときに業務をこれだけしてくださいとお願いするときなどは明確化ができなかった部分が反省として残りました。

続いて会計の話に入っていきます。予算のことになりますけれども、横軸は時系列を指しています。登山大会の滋賀大会、岡山大会、山形大会、三重大会、平成30年、福井国体もあった年です。令和元年度の宮崎大会、福井大会と来ています。続きまして、縦軸を見てください。縦軸はインターハイに関わる運営費、経費の支出金額です。一番上のラインは3,000万円と書いてあります。そして、緑色の棒グラフを注目してください。これは総額です。一番高いのが平成29年の山形大会、2,700万円ぐらいです。令和元年度の宮崎大会、同じく2,700万円ぐらいです。日本の中央よりも端になると旅費がかさむということもありまして、非常に高かったです。結論的に言いますと、福井大会は過去の中で総額を一番抑えることができました。1,664万円でした。

続いて、総額の中で一番たくさんお金を占めるのが水色の旅費です。旅費は役員さんのJR運賃とホテル・宿泊代になります。総額、おおよそ半分ぐらいを占めております。予算に関しては、ここに書いてあるようなホテルの宿泊費が高くなったとか、長袖シャツの支出ができないとかいろいろな制約がありましたが、苦労しながら何とかかんとか乗り越えてきました。

事前行事と式典、これも話をすれば長くなるのでかいつまんで言いますと、前年度の9月からプレ大会、該当年度6月に各都道府県でもインターハイの予選がありますね。これらもインターハイに向けての準備もしていたのですが、一番大変だったのは、6月、7月の役員研修、7月の事務局会議、この6月、7月で3回の会議と書いてありますが、登山を含んでいます。ざっくり言いますと、地区大会、東北大会の選手がいないバージョンをこの2カ月で3回実施する。そして、同時並行として大会前の会議も準備していく。そして、同時並行で開会式・閉会式の準備を進めていく。これだけならまだしも、皆さんお気づきだと思うのですが、この研究大会でも研究紀要ができていますように、プログラムも作らなければならない、プログラムを印刷屋に持っていくだけではなくて原稿も作る、スポンサーも集めてくる。さらには、一番大事な各都道府県から一気に参加申込書が来ます。郵便物とメールで、私のところに連日60通、70通のメール、しかも、それが簡単に開けない。こういうところがかなり苦労したところでもありました。

重なるときは重なって、どれも重要な行事で削減は無理。実施すべき業務が集中、このときこそ最適化は課題でした。正直言いますと、仕事をしながら日付変更線が何度か超えていました。それが終わってから片道1時間半、雨の高速を乗りながら自宅に向かうのもなかなか厳しいものがありました。

では、実際に福井大会は実現できたのでしょうか。大会前にコロナ感染がどんどん広がっているのを、出場チームから辞退させてくださいというのが1チーム出てきました。それから、濃厚接触者になったので役員さんが2名交代しました。結果的には大丈夫、そのままでしたけれども、安全策をとらざるを得ませんでした。そして、1日目開会式、2日目登山、3日目登山、4日目閉会式を何とかかんとか乗り切ってきました。参加は641人、こういう

内訳です。この中には式典の来賓とか報道陣は含まれていません。彼らを全部入れますと、冒頭に申しました700人になっていきます。

そして、4日間の発熱と体調不良者は9名出ました。このうち病院を受診したのは3名、1名がPCR検査を受けました。夜中に陰性であったということで、0名になりました。何とか何とか実施できました。

今から映像で大会を振り返っていきます。初日、開会式場、勝山市体育館ジオアリーナ、こういう形です。全国の建築物コンクールでも優秀表彰を受けているように、近代的な建造物です。皆さん、バドミントンで山口茜選手をご存じでしょうか。彼女は福井県勝山市の山奥の辺鄙なところの出身ですが、小中学校時代から全国大会、世界大会に向けてきたので、勝山市をあげてバドミントンの体育館を作りました。地元では別名「山口茜ちゃん体育館」とも言われています。

その体育館の2階には、1周200mのランニングコースがあります。これは大会前に業者が出場チームの記念撮影をしています。ちなみに、オレンジ色のランニングコースは、男子隊の監督さんの宿泊場所です。寝袋を敷いて寝るということになります。

これが開会式です。選手、監督さんはここに全部並んでいます。すべて縦横1m以上の間隔を空けています。待機室にもラベルを貼ってこのように設置しました。体育館のフロアに緑色のシートを引いています。撤収するときにはかなり大変です。遠くの方は見えますでしょうか。ここに黄色の線が何本か入っていますが、宿泊するときの男子の宿泊エリア、1チームごとに割り当ててあるものです。役員数は、従来は初日から来ていただくけれども、密を避けるために役員は当初の半分以上の出席に抑えました。

開会式の審査です。選手たちがペーパー試験、自然観察、救急、医療の3種を自分が座っていたパイプ椅子を机がわりにして試験を受けています。4人のうち3人がペーパー試験を受けて、もう一人が天気図審査、ジオアリーナから徒歩10分の勝山高校の普通教室で受けています。黒板の上の茶色いのがスピーカーで、ここから気象図報が流れて、これで天気図を作成しました。

続きまして、昼食です。完全座席指定です。一人おき程度で座席が配置され、座席は固定です。ご飯を食べるのもこの場所ですということにしました。もちろん、除菌作業は宿泊担当者の仕事になってきます。

テント設営所に移動していきます。テント設営審査を終えて1日目、宿舎に戻りました。

2日目に入ります。三頭山・大師山コースの登山です。早朝の勝山城に向かっているのが男子隊、森から登山が始まっていきます。見えますかね、次に出発するのを待っているこの後ろの水色の建物のようなもの、レンタルトイレ16基を設置しています。1基6万円します。しかし、これはお医者さんのほうから、出発前にしっかり水分を取らせてしっかりトイレをさせてくださいということで、登山口に必ずトイレは一定数を確保しました。平泉寺は苔で有名ですが、ここの歴史の道を歩いていきます。

これはある女子チームをたまたま撮っているのですが、このザック重さは12kg～15kg入っています。重たいからこの荷物は置いていこうとなると、装備審査がありますので減点を食らいます。必要な装備はきちんと持っています。それから、このチームはかなり体力があるチームだと思われるのが、足のラインがみな同じにそろっています。強いチームほど同じ幅で、息を切らさずにどんどん歩いていくのが分かります。

こちらは男子チームが休憩をしているシーンです。皆さん、休憩だというと、よっこらしょと座りたくなりますよね。ところが、全国レベルはピンピンしています。何をしている

かということ、おしゃべりもしますけれども、そのおしゃべりは読図です。今どこにいるのか、いずれも審査が入っていますので休んでいる暇はありません。そして、麓に下りてきて、ここで装備審査が終わりました。そして宿舎に戻りました。

次に、取立山コースの登山です。大体2m間隔ぐらいで歩いています。途中では専門員の減点もありました。

これはピークから見た勝山市です。勝山市は盆地です。ここに白い建物がありますが、皆さん、行かれたことがありますか。福井県立恐竜博物館、非常に有名になっています。それから、こちらが福井市、そして、その向こうに日本海が広がっているということです。

最後に、沢を渡って下山しました。そして、バスに乗車します。女子選手の隣、一つ空いています。これは50人乗りのバスに24人、選手が4人ですから6チーム1班が一つのバスに乗っています。密を避けるためです。それから、アクリル板を用意してもらっています。こういう対策を進めながら大会が進んでいきました。

そして4日目、閉会式、成績発表です。一番後ろから見るとこんな感じです。優勝チームの表彰です。団体男子優勝、静岡県富士高等学校、団体女子優勝、千葉県千葉東高等学校。そして、これが裏方の大会本部でした。

ここまでこうやって何とか実現できてきたのですが、最後に、成果と課題についてです。安全・安心な大会、持続可能な大会ということで、コロナ対策は十分だったか、最適化はできたのかということを確認していきます。

まず、コロナ感染対策に関して、現在は第6波と言われていますけれども、横軸が時系列です。2021年1月に第3波、4月に第4波、7月に第5波、東京オリンピックがあつて8月はどんどん数が伸びていきました。縦軸はトータル感染者の数です。2万6,000人と出ています。ここに福井大会の登山大会を青いラインで入れてみます。こうなります。まさに一番感染が進んでいるときに大会を行っていたことになります。

続いて、福井県の状況を見ていきます。同じく横軸が時系列です。第3波、第4波、第5波となっています。縦軸が人数ですが、一番トップで60名いっていません。福井県は50人を突破したらすごい数だと、都会から見れば可愛いものかもしれませんが、非常に警戒していました。再び登山大会を青いラインで入れてみます。こうなります。これも福井が感染状況がピークを迎えていた頃に大会をやっていたわけです。それでも何とか登山大会の陽性者はゼロでした。ただし、福井県開催は、陸上、サッカー、ソフトボール競技など13競技あったのですが、コロナ感染者が出ました。6競技で14校から感染者が出て、その都度対策をしていきました。

ここで、来年度大会に向けて全国高体連に提案がありますが、課題です。現在は熱中症の予防とフローはあるのですが、感染症の予防とフローをプログラムに掲載すべきではないかと提案しています。登山大会では看護師の会場地待機が少し不足しました。これが反省でした。さらには、会場地役員、補助員にもお茶を持っていきなさいと言いましたが、どうしても不足します。大会スポンサーであるOという製薬会社に、粉末ではなくて、すべての関わる人にドリンクを用意したいということも申し合わせておきます。

持続可能な大会、最適化に関しては、ここにまとめましたが、これも大変申し訳ございませんが、研究紀要のほうにまとめてありますので、この内容は後で確認をしておいてください。先ほど言ったことと重複してきます。

まとめに入っていきます。皆さんにぜひ持ち帰っていただきたい、take home messageです。この発表から皆さんご自身の自分の競技に当てはめてほしいということです。もし皆様

が自分の都道府県の予選を運営する、あるいは、東北大会、近畿大会を運営していく、あるいは、来年四国でインターハイを実施していく、そして、会場のそばに現地のスタッフの皆さん、たくさんの方がスタンバイしていますが、この研究大会を運営している青森の皆さんにも見てほしいところがあります。それは強みと弱みです。自分たちの持っている強みは大いに利用しまくってほしい。そして、弱みは何とかカバーするけれども、カバーしきれない部分が出てくるということです。

重点対策、しばらく感染症対策は続けざるを得ません。ヒト・モノ・カネの最適化、これは私のほうから皆さんに、福井大会はこうしてやったんだよというメッセージでもあります。

成果と課題に関して。この研究大会は、来年は長野大会にいきます。反省点、改善点、いくつかあるだろうと思いますが、これをぜひ長野県の皆さんに伝えてほしいというのも私からのメッセージになります。

私のインターハイに関しての発表は、コロナ禍において、本当にこの大会をやってよかったのか、うちの妻からも、本当に大丈夫なのか、勝山高校の補助員を出す校長先生からも、親御さんが随分心配していますと様々な声を聞いていました。そして、何とかやりました。それがよかったのか悪かったのか、なかなか一言では言えません。参加した選手の声から大事そうなのをピックアップしてきたので紹介します。

「赤紫色の空と雲と山。鳥の声。山に囲まれた集落。きれいな緑の田んぼ。地元の人の温かさ。好きになった福井のまち、また訪れます。」「受験勉強真ただ中、8月の感染者がどんどん増大していきました。いつ大会に出場できないと監督さんに言われるかずっと不安でした。福井に来てからも心配でした。最後に監督さんと一緒に歩けるパーティ行動の機会を設けてくださった事務局に感謝します。」「県予選で、0.2点差でつかんだ全国切符。一緒に参加した仲間は一生の宝物です。」これが福井大会でした。

福井大会の現状、強みと弱み、大会を実現するための重点対策、後催県、他競技には成果と課題というメッセージを残して、今後のインターハイ運営につながることを願って私の発表とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

【鞠子先生】

谷口先生、改めましてありがとうございました。会場の皆さんからももう一度大きな拍手をお願いします。

本来であれば、質疑応答で早速聞いてみたいことなどをぶつけていきたいところですが、時間の関係もありますので、最後のほうにそちらの時間設定をさせていただきたいと思います。

ここからは、長崎県の中里さんにもご登壇いただきまして、3人で議論を進めてまいりたいと思います。それでは、長崎県の中里さんをご紹介します。長崎県立佐世保西高等学校、柔道部顧問の中里圭輔さんです。昨年度の課題研究では、「持続可能な部活動であるための部の魅力創出」をキーワードにして調査結果を導き、今後の在り方を提案いただきました。今回はそうした好事例のその後のお話も伺えるようです。どうぞよろしく願いいたします。

【シンポジスト】中里圭輔（長崎県立佐世保西高等学校） ※以下：中里先生

よろしくお願いします。

【鞠子先生】

では早速ですが、中里さん、今の福井県、谷口先生の課題研究を横で聞いておられた感想をいただければと思います。いかがでしょうか。

【中里先生】

まずは、谷口先生、お疲れさまでした。私は、1部活動1顧問にスポットを当てて研究してきましたので、今回改めて大会を運営する立場でのご苦勞や、持続可能な大会運営の難しい部分を知ることができました。部活動数が減ると、参加する選手もですが、顧問を含め大会に関わる関係者の数が減ることにもなるので、部の統廃合や廃部は大会運営にも大きく関わると思いました。また、参加校数が減ると運営費にも響く上、参加費自体の値上げにもつながることが予想されました。

そこで、谷口先生に質問ですが、福井県では登山部の存続に向けて、何か取り組み等されていることがあれば教えていただければと思います。

【谷口先生】

大変難しい質問ですが、実は、インターハイを引き受けたときには加盟校が6校ありました。やむを得ない事情でどんどん減ってきたわけですが、減ってしまった分はどうにもならないので、残った3つをいかに充実させていくか、0と3は全然違いますから、インターハイも挑戦できます。私が思うのは、結局、指導者だと思うのです。指導者が一生懸命やっていくのは当たり前というか、そこができればいいのですが、経験がない学校もあります。そこをいかに私たちOBが関わっていくかということになるのかなと思います。

【中里先生】

ありがとうございます。

【鞠子先生】

中里さん、ありがとうございます。谷口先生、3つの部活に減っていったしまった、さらに、福井大会が控えていて、もっとさらに減るのではないかみたいな心配とか、そういったところはなかったでしょうか。

【谷口先生】

確かにありましたね。ただ、これはどうにもならないことなので、この3つをいかに充実させていくか。回答になっていませんが、いろんな形で若い子も集めて話をしたりとか、励ましたりとかしながら、何とかかんとかやってきています。

【鞠子先生】

ありがとうございます。その励ましを向けたのは、若手のこれからの部活を担う教員にということですね。

【谷口先生】

そうです。若手のまだ経験がない先生を交えながら、私の家に薪ストーブがあるのですが、おいでとか、こういうことをしながら山の話などをしております。

【鞠子先生】

ありがとうございます。では、昨年度、そして今年度とコロナ禍において多くの苦勞があったかと思います。先ほどの谷口先生の発表の中でも、6割、7割がコロナ関連だというお話もありました。会場の皆様も定例の会議がオンラインになるとか、あるいは、中止、延期を余儀なくされて計画の変更に迫られるような場面もたくさんあったのではないかと思います。そうした意味でも、課題研究をまとめる中での苦勞話、あるいは、特に先ほどの発表も時間の枠が限られていたので少しはしられた部分もあるのではないかと思いますけれども、話せなかった苦勞話などがありましたら、少しここでご紹介いただければと思いますが、谷口先生、いかがでしょうか。

【谷口先生】

一番ヒヤリとしたのが、先ほどもちらっと申し上げました、発熱をした選手が初日、開会式後に出てきました。男子生徒でした。そのチームを全体から離れた、ジオアリーナ内の施設に置いて、さらに、発熱者はまた別の部屋に置いて、会場地の養護教諭にずっと付き添っていただきました。当然、記録もとります。熱が下がらないので、念のために近くにある病院に顧問の先生に連れていってもらいました。逐一報告が入っていたのですが、医師がPCR検査を依頼した。そして、それが夕方6時ぐらい、その返事が10時ぐらいに返ってきました。「陰性でした。特に処置することはありません。」という連絡を受けたとき、医師、私たちスタッフ一同、本当にホッとしました。養護教諭は若い先生で結婚したばかり。「私、濃厚接触者になってしまいますよね。」と。たまたま私の教え子だったのですが、「そうだよね。でも、俺たちも一緒だ。」と。ただ、本部も、私は接触したけれども登山隊長は離しておいたとか、そういうこともあったのですけれども、ここが一番ヒヤリとしたところです。

あとは、何とかゼロになったということは、役員も含めて、選手、監督も皆さん指示をきちんと守っていただいて、感染症対策をしていただいたということです。

【鞠子先生】

ありがとうございます。もう少しお聞きしたいんですけれども、かなり予防策を立てて健康チェック対策をされたということは、先ほどの発表にもございました。PCR検査ですとか、あるいは抗原検査ですとか、そういったものを選手とか監督さんに定期的にやるような場面は、この大会の中ではどうだったのでしょうか。

【谷口先生】

今の質問ですけれども、私も同じことを考えまして、県の総体室に相談しました。結論は、経費、時間、その他の関係で、野球の甲子園なども含めていろいろなところを調査したところ、健康チェックカードで発熱があった場合の隔離措置を行う、PCR検査は準備に入れないとの回答だったので、私どももそれはそのまま、お願いはしたけれども、ダメと言われたらそれ以上関わっているとほかの業務に支障を来すこともあったので、そこは受け入れて、PCR検査なしで、発熱があった場合はもちろんしますけれども、そういうことでした。

【鞠子先生】

最小限にとどめての運営ということですね。ありがとうございます。

今、ヒヤリとした場面、そういった苦労話をお聞かせいただきましたが、中里さん、谷口さんのコメントなどを受けて、何か思い起こすような苦労話とか、あるいは、課題研究そのものの作成に当たっての苦労された点など、少しご紹介いただければと思います。よろしくお願いします。

【中里先生】

私の研究は、昨年度の発表に向けて4年前から4年間、研究を行ってきています。その中で、コロナの前の部分でしたので、アンケートをかけるとか、そういったところをどうしているのかというのは一つ悩みとしてありました。長崎県内には約1,200人の運動部の顧問の先生がいて、その先生方にどうやってアンケートをかけていくのかというところで用いたのが、紙面発表のほうにもありましたが、QRコードを読み込んだウェブアンケートを実施することでうまくまとめることができましたので、そちらの活用がうまくできたということが1つ。

あとは、持続可能な部活動を探っていく中で、取り上げていきたいところがあったのですが、紹介させてもらおうと、ある学校のバレー部ですが、人数が少なくてすごく活動が困っているという状況がある中で、こういう取り組みをしたら人数が増えて活発に活動できるよう

になりましたというところがありました。何を取り組まれていたのかを見ると、バレー部ということで、バレーに限らずビーチバレーを取り入れて、ビーチバレーの大会に出場したりして生徒たちのモチベーションを上げたり、ほかの生徒たちの入部を促したりということにつながって、非常に活発にやることができたという話を聞いていたので、ぜひ現地調査に行こうと思っていたのですが、年度が変わって学校に実際に連絡をしてみると状況が変わっていきまして、今はそういうことはないんですと言われてしまいました。どうしたのかと確認をしたら、バレーをしたい生徒とビーチバレーをしたい生徒ということで二手に分かれて、部が半分になってしまって、活動自体がうまくいかなくなってしまったという話を聞きました。そこがうまくいっていたら、また紹介して取り上げてということも考えていたのですが、最終的に現地調査までいくことができなかったのも、ちょっと残念だったなというところがあります。

【鞠子先生】

ありがとうございます。私はサッカーをやっているのですが、フットサルを取り入れて、11人制のサッカーとフットサルで両方やっていこうみたいなのは、意外にリスクもあるということですね。ありがとうございます。

今お話しいただいた中で、1,200人の顧問の先生にウェブアンケート、QRコードを利用してアンケート調査を行ったという話がありました。東京も一昨年、課題研究をやったときには、業者にアンケートを作成してもらうですとか、ウェブも考えたのですが、ウェブだとそのときにはとれない生徒等もいるだろうということで紙面にしたりして、結構予算がかさんでしまいました。そういう意味では、今回の1,200名へのウェブアンケートにかかった費用などは、実際どのような状況だったのでしょうか。

【中里先生】

長崎県の場合は、公立の学校の先生たちは全員、ポータルサイトというサイトでつながっていきまして、メールアドレスがあって、その中の一つにウェブアンケートを作成して先生方にアンケートをかけることができるものが入っています。そちらを使ってアンケートを作成して、ネットの無料サイトのところでQRコードにし、私立の先生たちにもQRコードをお渡しして読み込んでもらえれば、私立の先生たちもできる。最終的には、入力したものは私のアドレスにエクセルデータで飛んでくるので、処理もすごく早いという形なので、実際、お金はほぼかからずにアンケートをとることができたというのは非常に大きかったです。

【鞠子先生】

すばらしいシステムを活用されているということですね。ありがとうございます。

今、苦労話をお聞かせいただいているのですが、谷口先生、今、谷口先生の発表の中にも苦労話があったのですが、私からももう少し踏み込んで聞いてみたい内容があります。思い切った改革をしなければだめ、従来型に戻す考えではだめということで、いろいろご苦労されたのではないかと思いますのですが、外から人材をかき集めるところが、ある種のチャンスでもあり、実際に集めてみると、事前研修というのでしょうか、その周知徹底が難しいというお話もありました。そのあたりは、最終的に周知徹底が難しかったことで運営に支障が出るですとか、何かそういった苦労はあったんでしょうか。もう少し教えていただければと思います。

【谷口先生】

苦労話というと、実は、大会前までが実際、苦労話が多いです。私はお一人お一人をすべて、他県の方は別として、専門員さんを通じてお願いした人もいるのですが、基本的に役員

の皆さんと携帯電話とかメールですべてつながっています。そして、初めてお会いする人、人づてに聞いて紹介された人、自分から探していった人、多種多様います。学校の教員もいますし、たまたま山で知り合って、山岳会に所属していない、「今度インターハイがあるんだけど、どうですか。」と、山の上のナンパみたいなものですが、こういうことも実際にありました。そんな人に限って助けてくれました。初対面の人とどこで待ち合わせしましょうかと、これも悩みました。喫茶店とかそういうところになりますかねとか。若い看護師さんの場合もありましたし、教え子の場合は居酒屋でちょっと一杯、まだそれほど大変な時じゃない場合、オリジナルTシャツをプレゼントしながら、お金に糸目はつけずに、とにかく来てくださいということがいくつかあって、最終的には集まってはきましたが、ほとんどがうれしい出会いでありました。あるとき、かつての同僚で、人間関係がよくできていた人だったはずですがけれども、こういう人がいるよと聞いたので、「ぜひ先生、その人の連絡先とかインターハイについて頼んでもらえませんか。」とお願いしたところ、「何ていうことを言うんですか。何で連絡先まで言わなあかんのですか。」「いや、インターハイをするときに連絡せなあかんことがたくさんあるんです。」「私はそういう人には協力できません。」、え？と一瞬疑ったような嫌な思いとか、あるいは、人間関係でひびが入るというのは、登山に限らず、ほかのアーチェリーの会場派遣の先生とか、あるいは、自転車の先生とかソフトボールのベテランの先生などでも、人間関係で随分苦しんだところはあったという報告は受けています。

そして、鞠子さんの質問にあった事前の研修は、結局カバーしきれない苦労というのは、事前研修はもう始まってしまっているのも、そのときの運営もすべて事務局が、何から何まで、事前のバスの手配、弁当の手配、無線機の手配、会場を押さえる、メールで出欠確認、持ち物はこれですよとか、質問はありませんかとか、質問のメールが来ればそれも返さなければならぬ。山を登ってきましたら、今度は夜のミーティングの司会、記録、その集約、まとめ、これらが全部こちらにかかってくるので、もちろん分担はしているけれども、その運営をするので精一杯。参加できない人もいます。ここがづらいところではありました。一方で、熱心な人は、3回のうち2回来てくださいということなのですが、いや、それでは心配だからと休みを取って、自費で事前に練習で登山をしましたと私にメールをいただいたのが県外から10人ぐらいありましたので、これは心強いなと思いました。こういううれしいこともあれば、ちょっと嫌だなという思いもしました。こんなことが苦労話の一端です。

【鞠子先生】

ありがとうございます。先ほど研究を進めるためのウェブアンケートによって費用が大分抑えられたという話がありましたし、大会運営の中でも、ほかの大会に比べてかなり費用を抑えることができた。そのノウハウは後催県に確実に引き継がれていらっしゃるんですね。

【谷口先生】

はい。実はその件に関しては補足をしようと思っていただいたところで、よく振っていただきました。登山大会の伝統的なスタイルとして、引継ぎ会というのを大会が終わった1カ月後に、今年ならば福井県大野市で、自然の家のある大野市で実施する予定でありましたが、まだコロナ感染状況があったのでウェブ会議で行いました。すべてのアンケートを包み隠さず、失敗事例もたくさん、会議において報告をしてあります。

具体的に言いますと、次期開催県である香川県、そして次の北海道から質問を受け付けました。こんなときには何をしていたんですか等、事細かく、それを項目ごとにエクセルの表で作って、福井県の集計をして、それをつないでいく。コロナがなければ顔を合わせて、実

際、ああだった、こうだったという話を今まで私たちもやってきました。群馬がなかったのが宮崎まで行ってやってきました。正直に言いますと、大変失礼ですが、失敗事例に興味がありました。宮崎大会で仮設トイレの数が圧倒的に不足した、ここがポイントだなと。輸送が混乱した、ここがポイントだなということで、お金をかけるべきところはかける。つまり、トイレ代とバス輸送に関してはしっかりと、密と時間短縮になりますから、かけました。一方で、節約できたのは、会場費がほとんどただである。自然の家、勝山市の施設は全部、減免申請さえ出せばゼロ円です。たくさんの物品を借りました。全部ただです。うまく節約ができたのは、すべての項目において、印刷費、役員の服飾費も含めて前年度に比べて、勝山市の入札が上手だったということもあるのですが、かなり節減ができてきました。これは、放っておいても市も県も会計担当者がいて、これは無駄じゃないですかとヒアリングで本当に削られていきます。こちらどうしても最小限のものにせざるを得ない。慣れていませんので、あまり減らし過ぎてしまったな、後で戻してくださいということもあったのですが、そういう意味では、県と市の担当者が的確に余計なものを削ってくれたということが経費節減にもなったのかなと思いました。

【鞠子先生】

ありがとうございます。かなり勝山市がバックアップしてくださったという話も冒頭にありましたが、そのあたりの自治体の協力も、例えば、香川県、あるいは北海道にも引き継がれていると受け止めてよろしいですか。

【谷口先生】

そのとおりです。

【鞠子先生】

ありがとうございます。では、ここまで福井県の発表にあった大会の持続可能性という大きな枠組みについて議論してきました。また、課題研究というものをまとめる中での苦労話も長崎県の中里先生からいただきました。

そして、大きな大会の持続性という枠組みから、次からは、日常的に行われている部の持続可能性のことについて、少し話題を移していきたいと思います。長崎県の課題研究では、日常的に行われている部の持続可能性の魅力創出という観点でまとめておりました。その点から中里さんからお話を伺いたいと思います。よろしくお願いします。

【中里先生】

お手元の資料に、活性化委員会から「持続可能な部活動—コロナ禍で見えてくる大切なこと—」という資料がお配りされていると思います。後ろから2枚目の裏側に四角が2つありまして、下のほうに「まとめ・持続化に必要な要因」ということで、①から③まで挙げていただいていると思いますが、これは私が発表で使ったときのまとめの部分を使っています。日常的に部活動をどうしていくのかというところでは、ここにあるように、①顧問の創意工夫による取り組みであったりとか、②魅力の創出となるような付加価値を部活動につけることができるということ、③部員が満足感、達成感を持って取り組めるという3つに限るかなと思います。このどれかが欠けると、どれも大事ですが、3つ満たしていくと非常に持続化につながっていくのではないかなということで、私としてはまとめさせてもらっています。

【鞠子先生】

ありがとうございます。では、谷口先生、中里さんのお話の中で、少人数の部活動でもこういった点を満たしていけばというような視点がございました。登山専門部でも少人数でお

困りというお話がありましたが、何かヒントを得た視点などございますか。

【谷口先生】

私は登山です。会場の皆さんもそれぞれ、テニスであるとか陸上であるとかお困りの方もいらっしゃるのではないかと。そういう意味で、中里さんから提案いただいたキーワード、「創意工夫」「魅力の創出」「付加価値」「部員の満足感」というのは、どの競技においても共通するものだかと。そして、皆さんおそらくここに引っかかるようなものを工夫されてきているのではないかと思います。直接的に具体的に言いますと、登山などでは、加盟校が3つしかないというのが大変残念な話ではあるけれども、逆に言うと、大型バスを1台借りてしまえば、時期さえ合えば、県のすべての山岳部の生徒さんを連れて、一緒に北アルプスであるとか南アルプスであるとか、一つの学校がしにくいこと、また経験がない顧問がいたとしてもお互いに協力できる。そんな中で、ミニ大会のようなことができるかもしれない。そこが付加価値と結びついていたり、部員の満足感、達成感にできるのではないかと。そして、それぞれの競技でもプラスアルファの、中里さんの話を聞いていたら、プレゼント企画とか、おまけというかお得なものも考えると、登山の場合などは、山から下りたら温泉に入れるよとか、日帰りならばバーベキューをしようとか、時には入れてあげるというのも手なのかなと。これは若い先生たちにもどんどん実践しながら伝えていきたいかなと。そんなヒントを今、改めて思いました。

【鞠子先生】

ありがとうございます。では、中里さんにもう少し、まとめの3点のところについて詳しくお聞きしたいんですが、②魅力創出となるような付加価値を部活につけるとありますが、具体的な調査で明らかになった付加価値というものについて、もう少し詳しく教えてください。

【中里先生】

部活動の「〇〇部」という名前だけでは生徒がなかなか興味を持って集まってこない。そのため人数が足りなくて活動できないというのが多かったのですが、付加価値として、私が調べて挙げるとすると、ものすごく当たり前というか、先生方もされているようなことにはなるのかなと思うのですけれども、例えば、練習の後に食事会を開くというところに始まり、季節に応じた行事を生徒たちと一緒にやる。遠足でもいいですし、キャンプでもいいですし、コロナでそういうことをするのが非常に難しくなっているのですけれども、その部に入ることによって、実は、ただ運動するとか体を動かすとか、大会に出るだけではなくて、ご飯を食べる、お菓子を食べる、または、谷口先生の言われるように、登山部でなくても山に登ってみるとか、そういったことを行っているような部活が生徒たちも非常に魅力に感じている中の一つにあるということがアンケートの中身から見えてきました。

【鞠子先生】

少し種目にこだわり過ぎない部分とか、あるいは、人としての顧問と生徒、あるいは、生徒同士のふれあいということも大事になるということですかね。ありがとうございます。

では、会場の皆さん、ここまで大会や部の持続可能性について探ってまいりました。ぜひ会場の皆さんにも参加していただいて、会場全体でディスカッション、または質疑応答ができればなと思っています。まずは、福井県の課題研究について、そして、中里さんのお話にあった部活動の持続可能性について、ご意見、ご質問をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

【質問者】 鈴木先生（兵庫県立神戸高塚高等学校）

兵庫県の鈴木と申します。登山の大会というのは、実は私はサッカー部で、隣が登山部の部室であったので、大会があるとか、順位を決める方法とかは高校時代から知っていたり、前の職場の先生が次に行った学校で急に登山部の顧問になり、全国大会に出場したこともあって、いろいろな話を聞く機会があったのですが、順位をつける登山の大会というのは、インターハイ以外にもほかにもあるのでしょうか。

もう一つ、この大会をきっかけに、「山ガール」とかというようなトレンドワードもあるように、普及とかにつながっている事例などがあれば教えていただきたいと思います。

【鞠子先生】

谷口先生、いかがでしょうか。

【谷口先生】

兵庫県の鈴木先生ですね。先生、学校はどちらですか。

【質問者】鈴木先生

私が勤めているのは神戸高塚高校という学校ですが、私の母校に登山部があって、隣が登山部の部室であったので、活動の様子や大会も全国大会とかに出ていたりしていたのでお聞きしたり、それから、同僚がほかの学校に行ったときに登山部の顧問になって全国大会に出たりしたので、その苦労話とかは聞いたことがあるので、いろいろな話は知っているのですが、ほかの大会はあるのか、大学生のインカレみたいなものがあるのか、一般の方が順位をつける大会があるのかということとはあまり知らないもので、その辺と普及のところ、どういう形でやっているのかなというのを伺いしたいと思います。

【谷口先生】

2点の質問ですね。では、お答えいたします。

全国大会規模、高校の登山大会はインターハイのみです。それに至る地区の予選、県の予選はあります。大学のインカレは、私の知る限りありません。なお、登山専門部が管轄しているところなのですが、オリンピック種目であるクライミング選手権というのは、順位をつけるものがあります。登山というのはそもそも、私もそうだったのですが、順位をつける必要があるのかなのかということで、山岳部顧問は大きく2つに分かれています。やはり上位入賞を目指す監督さん、楽しもうという監督さんがいます。しかし、私も上位入賞ができるようになってからは、一気に生徒たちが変わってくる。

ちょっと話は飛ぶかもしれませんが、一昨年度、滋賀県で鞠子先生が東京都の事例で、部活動の観点から「社会人基礎力」というキーワードをいただいたのですが、部活動を通して得られる力が、普通の活動をしていても得られるのだろうけれども、上部大会である地区大会やインターハイに上がっていくと、本当に化けてくるというか、人生観が変わるぐらいのものがいろいろな競技でもあると思います。

余談になりましたけれども、順位をつけるのは登山大会としてはインターハイの登山大会だけです。

続いて、インターハイをやっていることで「山ガール」など普及活動になっているのでしょうかということですが、ある意味では、そうなのかな、でも、それだけでもないのかな、実際、山岳部に入っていなくても若い人たちが以前よりも本当に増えているなという印象はありますが、これはソロキャンプであるとか、違う要因もあるのかなと思います。

お答えになっているかどうか分かりませんが、以上コメントさせていただきました。ありがとうございました。

【質問者】鈴木先生

大会で順位を決めることが経験や普及につながっていればいいなと私も思っています。ありがとうございました。

【鞠子先生】

兵庫県の鈴木先生、ありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。

では、今回のシンポジウムには、「コロナ禍で改めて見えてくる大切なこと」というサブタイトルもついております。コロナ禍での部活動や大会開催の意義など、現場におられる先生方の皆様の声もここでぜひ聞いてみたいと思います。いかがでしょうか。

先ほど課題研究や持続可能な部活動についての質問、ご意見をという話でしたけれども、コロナ禍で部活動をやっていくのはこういう大変さがあるとか、あるいは、実際に一時期止まった時期もあったけれども、やはり活動を再開してみて、生徒たちがこういったつながりを大切にして活動しているとか、皆さんが日頃感じている、当たり前かもしれないご意見をこの場で改めて共有したいということで、いかがでしょうか。大会を開催してみて、先ほど谷口先生の発表のまとめにも、生徒さんのコメントの一部抜粋がありましたが、会場の皆さんからも何かそういったお声を聞かせていただければありがたいなと思っております。

【質問者】 嶋崎先生（国際武道大学）

国際武道大学、嶋崎と申します。よろしくお願いいたします。

これは私の経験ということではなくて、私がいろいろな学校の部活動を調査させていただいている中ですが、集まって練習することができなくなったということで、例えば、フィットネスのトレーニングをオンラインで、みんなで画面を見ながらやっていく、個人が各家庭でやっていくとかということで、個人でトレーニングするという習慣が身についたり、あるいは、ラグビーですけれども、練習ができないのでゲーム分析であるとか、そういうことをオンラインでやっていくようなノウハウを学んで、個人がそれをやり、また、チームでそれをディスカッションすることによってラグビーという競技に対する理解が深まったとか、こういう事例はかなりあるように思っています。私は今回、高校ラグビーの大会を見ていて、これは全くの主観ですが、高校生のラグビーに対する理解度が深まっているのではないかと感じたりしています。部活動でできることは、みんなで集まらなければできなかったということばかりではないと思いますので、個人でできることが明確になったり、あるいは、体を動かすだけではないスポーツに対する取り組み方が見えてきたのではないかなというのが私の感じているところです。

【鞠子先生】

国際武道大学の嶋崎先生、ありがとうございました。ほかに会場の皆様のご意見、お声を聞かせていただければと思います。いかがでしょうか。

では、2年ぶりで皆さんも緊張されているようですので、時間の状況もありますが、会場の皆さん、鈴木先生、嶋崎先生、ありがとうございました。あっという間に時間も過ぎてしまいました。今回は「持続可能な部活動—コロナ禍で改めて見えてくる大切なこと—」というテーマで進めてまいりました。これを機会に、それぞれの現場で持続可能な部活動を盛り上げるための仕掛けを考え、そして、進めて共有していけたらなと思っております。

最後に、登壇してくださった皆さんから一言ずつ、また全体を通して感想をいただければと思います。まず、谷口先生、お願いいたします。

【谷口先生】

先ほどの繰り返しになるかもしれませんが、滋賀大会の鞠子先生の発表で、部活動というのは、ベースにあるのは生徒さんの成長、人間の社会人基礎力があるということを改めて私

たちは全体会で確認できたと思います。そして青森大会では、私は、続けるということ、継続、持続可能性ということですが、これを確認できないかなと思っております。大胆な改革をしながらでも活動は止めない、持続可能にする、大会を再開していく、止まってしまったものを何とかつなげていく、そのための具体的な方策とか方法とか種目によってそれぞれあるかなと思いますが、それを皆様にもう一度、この空間で共有できたらなと思いました。以上が感想です。

【鞠子先生】

ありがとうございます。中里先生、お願いします。

【中里先生】

私はこの大会で谷口先生の大会運営のすごく大変なところを知って、持続可能な大会があるのなら、部活動も持続させて生徒たちにもモチベーションを下げずに、しっかり楽しみながら、競技力を高めながら、いろいろな目的・目標を持って活動できるように、先ほどのような意見がある中で、YouTubeであるとかオンラインであるとか、いろいろな形で続けていくことはできるということも知ることができましたし、そういったことも新しい創意工夫とか付加価値として取り入れながら部活動を続けていければと改めて思いました。

【鞠子先生】

では、お二人の先生、ありがとうございます。これにて課題研究・シンポジウムをお開きにさせていただきますが、最後の最後に、研究部活性化委員会として、持続可能な研究部の在り方を検討するために、5年に一度、各都道府県研究部の組織と活動概要調査というものをお願いしております。令和3年度はその第3回目ということで、各県に既にご協力いただいております。どうもありがとうございます。この調査内容と結果のフィードバックにつきましては、来年度の9月常任委員会で行います。ぜひ各都道府県の研究活動を活性化し、持続可能な組織として発展するための資料として、それを各県でもう一度、他県の活動状況なども参考にして、それぞれの各県で活発な活動につなげていただければと思っております。よろしくお願いします。なお、5年に一度の調査ですので、次回は令和8年度に再び調査させていただく予定です。そういったことも含めて、研究部の人材も代わっていくとは思いますが、引き継ぎながら研究部の活動を頑張っていたいただきたいと思います。引き続きよろしくお願いします。

では、これで終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

【全体司会】

私も発表を袖で聞かせていただきました。どんな部活動であっても、前向きな考え方、そして、その考え方の工夫、さらには思い切った改革というのが必要なのだなということを非常に感じました。私の身近に山岳部はありませんでしたが、それでも部活動というのは青春の輝かしい1ページであったり、また、その部活動が将来の仕事につながるということもあります。また、例えば山岳部のような部活動が人生を生きていく上での底力になるということも改めて私自身も感じさせていただきました。

課題研究発表いただきました谷口様、シンポジウムを担当されました中里様、また、司会進行をお務めいただきました鞠子様、ありがとうございました。どうぞお三方に大きな拍手をお願いいたします。

【全体司会】

それでは最後に、全国高等学校体育連盟研究部部長、高野学からお話がございます。

【高野先生】（全国高等学校体育連盟研究部部長）

研究部部長の高野と申します。長い時間、シンポジウム・課題研究をお聞きいただき、ありがとうございます。また、雪の中、コロナ禍の中、教育活動は3学期の大切な時期にこの場に足をお運びいただき、本当にありがとうございます。皆さんの熱意に敬意と感謝の気持ちを表したいと思っております。

今、課題研究を谷口先生に発表していただいて、鞠子委員長にシンポジウムをまとめていただきましたけれども、改めて大会運営についての実践記録、また、少子化、部活動離れ、そういった中での部活動の活性化に関する実践記録を紀要にまとめている。この研究活動が非常に重要だなということを改めて私は今、感じています。

我々の世界、数十年前は、どちらかというと職人芸というか、職人の世界のような、背中を見て育つような、記録を残さず俺流みたいな感じで部活動をつくり上げてきて、それがやりがいにも感じながらやってきたような時もあった気がします。ただ、それでは部活動全体の活性化や持続化につながっていくのが非常に難しいと思っています。今、実践記録をつくっていただきましたし、発表していただきました。共有しました。この実践記録があるからこそ、振り返ってそれを検証し、工夫し、そしてまた、改善しながら新たなものをつくり上げていく。そこに新たな部活動の価値が見いだされているのではないかと考えています。今、アナウンサーの方も言われていましたけれども、部活動の価値とか意義というのは、我々はもう知っているし、本当に大切にしていかなければならないということは分かっているのですが、それがうまく外部に発信できない部分があります。今、文科省、スポーツ庁が進めている部活動改革等もありがとうございます。そういったことに対して現場から声を上げていく、こういった部活動が望ましいのだと声を上げていくためにも、こういった研究活動はやはり大切なのだというところが皆さんにもご理解いただけるのではないかと考えています。

また、発表の中でもありましたけれども、地域との連携とか行政との連携、民間企業との連携、そういったことも必要になってくる。顧問の力量を上げていくことが一番キーワードではないかということもありました。そういったことを考えていくと、この研究大会は内輪での、我々の仲間同士の研究大会ですけれども、もっともっと外に出て行って、ネットワークを広げながら、価値観を広げながら、そういう中で教育活動の部活動の位置づけを考えていくこともまた必要なのではないかと感じています。そういった意味でも、今日の発表はいろいろなことを示唆していただいていると思いますので、ぜひもう一度、紀要等を参照していただければと思います。

また、ホチキス止めの資料も配られていると思います。今、シンポジウムの中でも使われていましたけれども、この最後のまとめのところに、今、私がお話ししてお伝えしたいと思っていることがすべて書かれてありますので、ぜひ一読していただければと思います。そして、これをぜひ持ち帰っていただいて、各県、各学校でさらなる部活動の発展につなげていただければと祈念しておりますので、ぜひよろしくお願いいたします。

長くなりましたけれども、私からの挨拶に代えさせていただきます。

【全体司会】

高野部長、ありがとうございました。以上で課題研究・シンポジウムが終了いたしました。皆様方のご協力、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。